

研究例会報告

第1回研究例会報告 包摂と排除

2014年1月25日、東洋大学白山キャンパス第3会議室において、午後2時から5時30分まで、テーマ部会A「包摂と排除」の研究例会が開催されました。今回の第1回研究例会では、スイスのルツェルン大学のDr.コルネリア・ボーン教授に、Monetary Inclusion and Exclusionというタイトルでご報告頂きました。通訳は、同じくルツェルン大学の森川剛光氏にご担当頂き、赤堀三郎氏（東京女子大学）と森川至貴氏（日本学術振興会特別研究員（PD.））の二人に、今回のご報告をめぐって討論をして頂きました。

本報告では、「貨幣メディア」と「包摂と排除のメカニズムの分析」との関係が論じられ、貨幣（money）は、中立的な実体としてではなく、経済システムのメディアとみなされています。

ボーン教授は、貨幣経済への包摂は、貨幣メディアの使用法を探索することなしには説明され得ないという見地に立ち、現代経済における排除は、包摂的排除として考察され得ると論じました。これは、すなわち、誰も、現代経済のシステム、世界経済から完全に排除されることはできないということを意味しています。そのことを論じるために、第1に、ここで採用される「包摂と排除」という概念が明確にされ、第2に、経済的洞察と歴史的な貨幣のゼマンティック（意味論）に言及しながら、貨幣メディアの作用の様態が社会学的に素描されました。

また、その際、ルーマンのアプローチを視野に入れつつ、現代経済システムにおける「中心」、「半周辺」、「周辺」が区別されました。経済システムへの包摂と排除は、そのいずれにおいても見いだすことができるのですが、貨幣メディアは、消費を通じて一般住民を経済の周縁に包摂する一方で、「中心」への包摂メカニズムは、信用力であると論じられています。その信用の形式は、その歴史的な形成過程で、利潤の形成と社会的包摂の促進という二重の仕方で組織されています。また、微小の信用（マイクロクレジット）は、貧困・富裕の区別に適さない、中心への包摂のグローバルな一形式として分析されています。以上が、ボーン教授による報告の概略ですが、政治的、福祉的な視点と結びつけがちな「包摂と排除」の問題を、現代経済システムの問題として、ルーマンの見解に新しい視点を加えるかたちで論じて頂いたことは大変、興味深かったと思います。

次に、討論者のお一人の赤堀氏は、まず本報告の骨子を的確にまとめて、フロアの参加者にその理解がより深まるようにして下さいました。その他、重要な質問が5つほど出されました。

たとえば、赤堀氏は、ルーマンが、経済システムを論じる際に「半周辺」という項目を設けていないことを指摘し、本報告ではルーマン理論に言及しながらも、この項目を不可欠と考えた理由を質問しました。ボーン教授は、生産の場合を考える際には、「半周辺」という領域が必要であると回答していました。また、本報告の議論は、他の機能システムにも適用できるかという質問が出されましたが、その回答は、包摂の例として、選挙や給付などが挙げられました。その他、今回の報告において、経済領域における排除問題への処方箋として信用力に基づく支払い能力の発生が挙げられていたことについて、グラミン銀行のようなマイクロクレジットを例に挙げつつ、「合理性」の概念と相容れないのではないかと指摘がなされました。この点については、「利潤原理」ではなく、「包摂原理」が重要なのだという回答がなされました。

森山氏からは、「包摂的排除としての愛（Love as Including Exclusion）—同性婚とホモ規範性」というタイトルのレジュメをご用意頂きました。そこには、ルーマンの『情熱としての愛（Love as Passion）』やホワイトヘッドの『同性婚（Same-Sex Marriage）』などから、包摂と排除に関わる論点の抜粋が記載されており、それらを踏まえながら、現代社会における愛や同性婚をめぐる「包摂と排除」について論じて頂きました。その際、同性愛者を結婚システムへと包摂することが彼らの「支払い不能性」と密接に結びついていることも指摘されました。

今回の研究例会への参加者は、14名（報告者、討論者を含む）で、若干こぢんまりとした会合になりましたが、参加者の中から今回の報告に関する本質的で興味深い質問が数多く出され、また、ご報告自体の内容の質の高さ、討論者のお二人の入念なご準備、森川氏の巧みな通訳のお陰もありまして、議論そのものは非常に盛り上がり、有意義な会となったという印象をもちました。この場を借りまして、改めまして、ご報告、通訳、ご討論、ご参加頂きました皆様にお礼を申し上げたいと思います。

研究委員：本田 量久（東海大学）・中西 祐子（武蔵大学）

担当理事：水上 徹男（立教大学）・宇都宮 京子（東洋大学）

（文責：宇都宮 京子）